

# 弥勒寺蔵『読経口伝明鏡集』『法華経声事』解題と翻刻

——書写山伝来と円空書写をめぐって——

柴 佳世乃

岐阜県関市池尻の弥勒寺（天台寺門宗）は、古代大寺の遺跡が存し、また円空（一六三二―一六九五）の住した寺として有名である。円空<sup>①</sup>は、元禄の初め頃に故郷美濃の弥勒寺を再興し、その墓も同寺にある。

この弥勒寺に、円空自ら書写した『読経口伝明鏡集』が蔵されている。『読経口伝明鏡集』（以下『明鏡集』）は、法華経読誦が平安末から鎌倉初期にかけて芸道化するのに伴って纏められた「読経道」の口伝書である。弥勒寺本は、後述するように、その抄出本であり、また書写山伝来の本である。

さらに、『明鏡集』に続けて書写されているのが、『法華経声事』なる読経の字音などに関する書である。これもまた円空の書写にかかるものである。本書は、内部徴証から、書写山（播州書写山円教寺）における読経の口伝の集成であることが判明する。

本稿では、読経道の研究に重要な両書を翻刻紹介し、その内容について考究するものである。

## 【解題】

### 一、両書の書写伝来と体裁について

『明鏡集』および『法華経声事』は、『妙法蓮華経 卷二』版本（折本）の紙背に、円空によって両書引き続いて書写されたものである。二書以外にも、その後が続いて講式や血脈譜、願文などが記されている。この一連の書物は「円空手控帳」と呼ばれ、版本『妙法蓮華経』と同様の体裁を持つ『無量義経』など計四帖の裏に、三十種類の内容が記されているもので、ここに論ずる二書は、その内の二つの書物である。経本の見返しには「尾州智多郡薮村妙乘院常住物」と記されており、裏見返しには「寛永十三年丙子七月九日薮村六兵衛母」とある。円空の師円盛（荒子観音寺十世）は薮村の出身であり、これら経本は、円盛より円空に与えられたと推定されている。両書については、棚橋一晃氏による以下の文章がもっとも詳しい紹介である。

第二帖の手控帳側には、はじめに「説経口伝明鏡集」の書写がある（三十八折二百一行）。これには「下巻別巻也」の但書がある。この書は能誉の編になるもので、別に鎌倉時代の書写本が、宮内庁、東大に伝わっている。これは経文の読み方や諷誦法を記したもので、振仮名や朱点、四声の符号を多用している。巻末に「書写山光照院御本永正十八年辛巳六月六日寛文八年（引用者注、六日は三日の誤り戊申）九月廿日」とある。第一の日付は、播磨国飾磨郡の書写山円教寺の塔頭において写された日付で、第二のものが円盛の写した日付であろうか。ついで円空が「貞享二年甲子極月廿五日尾州蓬萊宮圓空書写之」と記している。これによって、手控帳のこの部分が、このとき熱田神宮において書写されたものであることが知れる。

次に、「法華経声事」という書を写している（三十八折百八十四行）。これも「上巻別巻也」とことわっているところを見ると、右の書と一対をなすものであったろう。<sup>(3)</sup>

また、『円空研究13〈弥勒寺文書〉』（円空学会編、一九八八年十二月）に「円空手控帳」全体の紹介があり、各書の部分的な翻刻と影印掲載（冒頭と奥書部分）がなされている。<sup>(4)</sup>

さて、「手控帳」一連の書の内、奥書を有するのは『明鏡集』のみである。棚橋氏ほか先行研究が触れるように、末尾に次のような奥書がある。

書写山光照院御本

永正十八年（辛巳）六月三日 寛文八年（戊申）九月廿日

貞享二年（甲子）極月廿五日尾州蓬萊宮圓空書写之（38折。後掲翻刻の折数を示した。以下同）

これによれば、書写山光照院の本（「光照院」とは、「御本」とあるので、格の高い書写山の子院、もしくは人物に寄せる院号か）が永正十八年（一五二二）に最初に書写され、寛文八年（一六六八）に次の書写、さらに貞享二年（一六八五、ただし干支〈甲子〉を信ずれば貞享元年）に円空によって蓬萊宮（熱田神宮）にて書写されたことが分かる。

「円空手控帳」の他書の書写がいつ頃なされたのかは定かではないが、少なくとも本稿に取り上げる『法華経声事』は、一連のものとして貞享元（二二）年に書写されたと見て良いであろう。両書とも書写山伝来本であり、同じ経路で円空が参看したと考えられるのである。ただし、『明鏡集』を師円盛が書写しているとすれば、円盛がどのようにそれに接したのかは今のところ明らかではない。<sup>(5)</sup>

かくして、かつて「円空手控帳」として紹介は行われたものの、各書の内容の検討や位置づけなどは未だ為されていらない。そこで、読経道の観点から貴重な二つの書を取り上げ、考究するものである。

## 二、『読経口伝明鏡集』について

『明鏡集』は、能譽により弘安七年（一二八四）に著された、読経道について体系的にまとめられた書である。<sup>(6)</sup> 読経道を構成する三つの重要な柱、字声を糺す・清濁を分かち・音曲を習う、という三点に添って記述されている。諸本には、大きく分けて文安本、永正本（三千院本）の二系統がある。前者は、最も多くの情報と内容を持つもので、序跋を含めた成立に関する記述が詳しく、また三点目の音曲条が詳細であることに特徴がある。後者の永正本系統は、音曲条はよりコンパクトであり、法華経音義として活用されるべく実用的な改変が施されたものと考えられる。永正本と内容が近い三千院本によれば、能譽の最初の撰述より一年足らずの弘安八年正月に最初の書写が行われている。<sup>(8)</sup> 二系統の諸本とその成立については、今後さらなる検討が必要であろう。<sup>(9)</sup>

さて、ここに紹介する弥勒寺蔵『読経口伝明鏡集』（以下、弥勒寺本）は、永正本系統の本である。本文冒頭部の文言の一致、入声フツクチキ表記の掲出文字の種類と数などから、同系統と判断して良い。さらに言えば、弥勒寺本を検討するにあたって参照すべきは、この系統の三千院本と薬師寺本である。<sup>(10)</sup> 三千院本は、書写奥書に文明十八年（一四八六）・永正三年（一五〇六）・永正九年（一五一二）などの年記がある。このうち、永正三年以降の書写には、書写山田教寺の塔頭名が記されている（永正三年「仏土院」、永正九年「十地房・東地房」）。

薬師寺本とは、薬師寺金藏院藏『法華声口伝』のことで、『読経口伝明鏡集』と書写山における『法華経』読誦の口伝とが併せて記されたものである。この点においても弥勒寺本の体裁と共通し、相互に参照する必要がある。薬師寺本には、以下のような奥書が見える。『明鏡集』末尾に「写本云、同山（引用者注、書写山）長史法印大僧都承順御本ヲ借書写之」（承順は、『書写山円教寺長史記』によれば、明応九年に没した「能読」の長史）、続く書写山口伝の末尾に全体の書写奥書があり、明応九年（一五〇〇）に南都にて舜済が、『明鏡集』以下の上中下三帖を一帖にまとめて書写した旨が記されている。

これに弥勒寺本の「書写山光照院御本」およびその永正十八年（一五二一）の書写奥書を併せて勘案すれば、十五世紀後半から十六世紀初頭にかけて、書写山において活発な『明鏡集』の書写伝来が認められる。ここに確実に今日伝わる三本を確認することが出来るのである。しかも、三千院本・薬師寺本・弥勒寺本を、字句にわたって相互に参照検討してみると、概ね同系統と見られるものの、大小にわたる異同が見られ、一山には複数の伝本が存在していたと推測される。なお、後述する『法華声口伝』の検討から、おそらく書写山に『明鏡集』が伝えられたのは、少なくとも十四世紀に遡ると思われる。

弥勒寺本はこうした書写山伝来の一本であるが、奥書に見える「光照院」とは、『長史記』等を始めとする書写山関係の資料には今のところ確認できず、不明である。

さて、弥勒寺本の内容について、三千院本・薬師寺本と比較しつつ、要点をかいつまんで述べておく。

① 前文・跋文にあたるものがない（三千院本には跋文、薬師寺本には序跋がある）。

② 音曲条がない（三千院本には省略されて載せられ、薬師寺本にはない）。

③ ところどころ、文中に省略が施されている。

④ 字声条のうち、入声「フツクチキ」表記の文字掲出がある（三千院本にはあり、薬師寺本にはない）。

まず①であるが、弥勒寺本は、序跋にあたるものが一切なく、本文のみを記したものである。本文冒頭部の記述は、三千院本・薬師寺本と通うが、本文末尾部分は、

為初心者委細記之ヲ。若相貽誹謬可直後賢之ヲ。〔三千院本〕

為二初心ノ者ノ一委細ニ記之。若相貽誹謬者、後賢可直之也。〔薬師寺本〕

に対して、

為初心令記之者也。〔弥勒寺本〕

とあり、いささか省略する形で記されている。これが原本に拠るものか、円空によるものかははっきりしない。

② 音曲条は、これを一切省いているが、薬師寺本なども音曲条が全く載せられておらず、同様に後半部を削つたものと考えられる。薬師寺本も、字声・清濁の二条に当たるもののみで、字音に関する部分を取捨して書写したことがうかがわれるので、それと同様の態度で書写され伝来したものと思われる。

③ については、「読経口伝明鏡集之内少々」とあるように、文中に多くの省略が施されている。また、省略のみならず、他本との文言の異同も少なからず認められる。例えば、『明鏡集』冒頭部を、対比のために掲げてみよう。

#### 第一、可糺文字声篇

先付<sup>讀</sup>三文字一專<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>四種ノ口伝<sup>一</sup>。所謂其ノ四者一ニ〔者〕四声、二ニ〔者〕六声、三ニ〔者〕八声、四ニ

九声等也。第一ニ四声者先文字四ノ角ニ指之点之。所謂文字前ノ下ヲ名テ曰ニ平声一、其形□如レ此。上名曰上声一、其形□如レ此。文字後ノ上曰ニ去声一、其形如レ此□。下曰ニ入声一、其形□如レ此。上四声ノ点圖ノ形合可出之。其形云□。／＼高野大師<sup>大僧証</sup>四声論ニ云、平上去入四声ヲ配ニ四方ニ。所謂東方ハ平声（平・伊・病・別）、（以下略）

（掲出したのは、三千院本。傍線部は弥勒寺本には記されていない部分である。「一」は三千院本になく弥勒寺本に記されるものである。また、傍点線部は異同のある箇所、弥勒寺本の記述を傍書した。）

このように弥勒寺本は、ところどころ省略しつつ記しているのである。しかしまた、掲出する文字の順が異なっていたり、言い回しの異なる記述なども見られ、単純なる省略とも言いきれない部分が存する。なお、細かい文言レベルで比較すると、薬師寺本よりも三千院本に近い系統と考えられる。大幅な略記は、書写者円空によるものなのか、円空までの伝来過程において生じたものかは明確ではないが、「く之内少々」なる内題下の書き付けから推して、円空が一連の書物を経本裏に書写する際に略記したのではなからうか。

④の入声「フツクチキ」の掲出文字は、永正本・三千院本に通う（薬師寺本には掲出がない）。諸本系統を考える際、沼本克明氏が示した「ツ」「チ」表記の文字数の異なり（文安本系統は「ツ」が四十三字、「チ」が五十四字に対して、永正本系統は「ツ」が七字、「チ」が八十九字）に照らせば、弥勒寺本は「ツ」が七字、「チ」が八十九字と、永正本（三千院本）系統に同じである。

かくして、弥勒寺本は、三千院本をはじめとする永正本系統の本文内容を持ち、諸処に抄略の施されたものである。書写山伝来の本が今日に複数伝わり、系統を同じくするものの、それぞれが一樣でないことも重要な事実

といえよう。

### 三、『法華経声事』について

本書は、表題が示すように、『法華経』の字音に関する書である。本文中に、書写山に關係する人物の名が複数見え、書写山伝来の『明鏡集』と一具のものとして、円空の元にもたらされたものであろう。

本書は、まとまった体系を持つ字音の書ではなく、書写山におけるいくつかの口伝を一ツ書などを以て備忘的に書き留めたものと推測される。大まかにいくつかの口伝のまとまりから成っているようである。

まず冒頭に、四声から十二声に及ぶ輕重の音についての解説が載せられる。これらは、中興書に「本云、延文四年〈乙亥〉六月十日、六根清淨住祐円」と記され、延文四年（一三五九）に「祐円」なる者が著したものだといふ。続いて、

私云、彼祐円法印ト申ハ、書写山禪光房大空上人御事也。書写経ノ音曲ヲ習留メテ干今无二断絶一、自国他国  
翫レ是者、偏ニ彼上人御恩也。彼上人者、書写開山性空上人御再来无レ疑。殊勝云々。可得意云々。

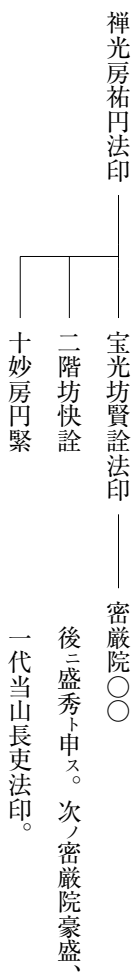
私云、一説ニハ宣仁上人トモ申ス。彼上人ノ御自筆本以写。

干時文明十七年乙巳九月一日書之。（45折〜46折）

と、祐円に関する情報を「私云」として載せる。<sup>11</sup>この内容は、大変貴重である。書写山における経の読誦、特にその音曲において、祐円が重要な位置を占めることがわかるのである。ところで、実光院藏『法華経声韻私』は、

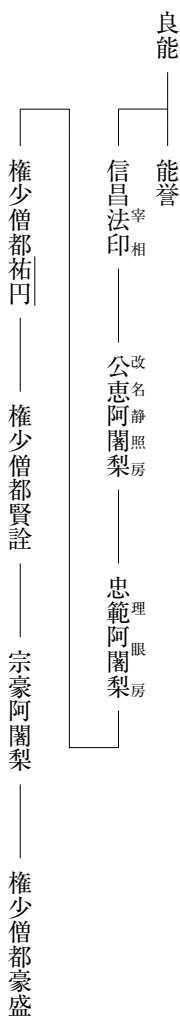
右と全く同じ奥書を有している（『昭和現存天台書籍綜合目録』による。原本未見）。祐円撰述の同一の書である可能性が高い。そしてこの祐円は、おそらく『法華經転読明鏡集』を著した祐円に同じであろう。近世の学僧宗淵が『法華經考異』（天保十一年（一八四〇））を刊行するに当たって参看した書のひとつに『法華經転読明鏡集』があり、それには「延文四年、書写山禪定房祐円撰」との情報が見出されている<sup>(12)</sup>。また、「書写山禪光房」（ないし「禪定房」）は、今のところ、書写山資料他に探しても見出せないが、おそらくその一坊であったか、祐円その人の房名だったのだろう。

祐円に関しては、本書の他、次のような記述を見出せる。書写山円教寺藏『法華音曲叩聞書』<sup>(13)</sup>の冒頭部分に、次のような書き付けがある。



この血脈と注記は、『法華經声事』にいう「彼祐円法印ト申ハ、書写山禪光房大空上人御事也」（傍線部）に一致する。

また、但馬温泉寺に伝わる『法華經音曲』<sup>(14)</sup>（書写山における読經音曲の内容と相承系譜）に、「法華經音曲相承血脈」が載せられているが、この中に「祐円」が見える。



(二部抄出、傍線引用者)

先の書写山伝来の『法華音曲叩聞書』の注記および該当する年代などを勘案すれば、本書の祐円と同一人物と見て間違いないであろう。<sup>(15)</sup>

これらを総合すると、祐円とは、十四世紀を通じて活躍した書写山の能読であり、読誦の音を体系的にまとめ、一山における読経道の隆盛を導いた人物と考えられる。『法華経声事』には、他に「是祐円法印ノ御勘合アテ書キ御出シ候」(52折)という一文が見える。祐円のもとで読誦の際の字音が沙汰された様子が伝わってくる。

さて、本書は続けて、一ツ書にて、法華経字音に関する細かな口伝を載せている。その中には、祐円の他に、「心空」「慈眼国師」「長信」の人名が記され、彼らの口説が見える。心空(二三一九―一四〇一)とは、書写山および都の内外にて、法華経の字音を研究し広めた人物である。『法華経音義』『法華経音訓』などの著書があり、その伝は、弟子の鎮増(すなわち「慈眼国師」)の『鎮増私聞書』<sup>(16)</sup>に詳しい。『法華経声事』の中には、

○実語教ト心空上人ノ法花経ノ音義見タリ。(61折)

○私云、心空上人御ナラシ少々書キ出ス。(61折)

○容顔甚奇妙ヲハ、心空上人容顔御ナラシ也。慈眼国師モヨウケントアソバシ。(68折)

の三箇所に言及があり、心空の法華經音義を参看した事実や、心空による字音の確定の様がうかがえる。「私云、心空上人御ナヲシ少々書キ出ス」という文言に続けては、『法華經』一卷より八卷にわたる文字声の掲出がなされているのである。祐円に続いて心空が、一山の字音研究と実践の中心に在ったことを示しているよう。なお鎮増（慈眼）に関しては、この心空の口伝中に、他に二箇所、

○慈眼国師ト長信ハクツキトアラハシ。(66折)

とあり、心空のみならず鎮増もまた、一山の字音についての説を開陳していることがわかる。これらは、薬師寺蔵『法華声口伝』の記述とも通底するものである。すなわち、『法華声口伝』には、

・善法寺心空上人貴命聞書如レ前。

・定願寺鎮増御量也。

・善法寺ノ音義、明鏡集ニモ、平ハ呉音、平漢音ト見タリ。「善法寺音義」とは、心空撰の『法華經音義』を指す。）

・先年、善法寺上人ノ仰ニ依テ一衆一同ニ読直サル、コト有リ。「善法寺上人」とは、心空を指す。）

・先師心空上人、一部ノ違フ所ヲナヲシ玉ヘリ。

などと、やはり書写山において法華經の字音が取り決めされた様子が描かれ、その中心人物として心空ならびに鎮増の名が繰り返し載せられている。但し、弥勒寺蔵『法華經声事』と薬師寺蔵『法華声口伝』とは、概ね一ツ書にて口伝が書き留められる形式にて共通するものの、掲出される心空の口伝がそのまま文言レベルで一致する訳ではない（ほとんどが別箇所の掲出である）。心空や鎮増への敬称を勘案すれば、おそらく両書ともそれぞれ

に、心空・鎮増らの後に、彼らに近しかった書写山僧によって纏められたと推定できよう。これらは、書写山に読誦の口伝が多層的に存し、読誦そのものが盛んに行われていた証左でもある。

さらに、末尾の一条には『明鏡集』に関する情報と内容を書載している。「良能、九重第一之<sup>マツマ</sup>読、仙洞參勤長者也。能譽ト、弟子信昌ト、二人弟子也。彼弟子、立明鏡集トテ一卷ノ抄作畢。其中云、「(74折)とする一条である。ちなみに、当該条は『明鏡集』中(字声の段)に見える文章であるが、弥勒寺本『明鏡集』はこの部分を欠いている。

その他、注目すべき点として、「音曲には」とする文言が複数存することである。「但し音曲の時あり」(54折)、「但し音曲にはクケンともよむ事あり」(70折)と、通常の読経に加えて、「音曲」にて読誦することがあり、なおかつその際には字声が変化することが述べられている。これは前掲『法華声口伝』にも「音曲の時」「是を音曲に読む時に」という文言があることに共通する。すなわち、読経道において『法華経』は、通常の読誦の他に、音曲(読経音曲)として唱われた事実が浮かび上がる。

\*

ここに紹介する両書は、書写山における読経道の継承と展開を考える上で、大変貴重なものである。いくつかの観点から、人脈と内容に触れつつ読解を試みた。両書の位相が明らかになればなお、円空研究においても資するところがあるであろう。円空の営みについては、円頓戒相承血脈ほかの書を併せ、あらためて考えてみたい。

- (1) 円空については、後藤英夫・江原順『円空―人と作品』（三彩社、一九六一年）、谷口順三『円空』（求龍堂、一九七三年）、『円空研究』一―二〇（円空学会編）などを参照。
- (2) 棚橋一晃「円空手控帳について」（棚橋一晃『奇僧円空』人間の科学社、一九七四年、初出は一九七〇年）。
- (3) 前掲、棚橋一晃「円空手控帳について」。文中の「能誓の編になるもので…」は、『国書総目録』の記載に拠ったものである。なお、『法華経声事』の「三十八折」との丁数は、四十折の誤りである。
- (4) 池田勇次による「関市・池尻弥勒寺文書（円空関係）」解説が載せられる。
- (5) 「円空手控帳」中には、例えば、「天台円頓菩薩戒師資相承血脉」がある（『明鏡集』などと同じ経本の裏書である）。「円盛（法）印」から「円空法師」への相承が記されているが、これがどのような性格の血脉か不明である。円空が記した血脉は、「忠尋」あたりまでは天台恵心流の血脉に相当するが、その後円空に至る二十五名ほどの人名は、おそらく実際の授戒を反映しているのであるが、その位相は今のところ不明という他ない。円盛は薬上流を受けているとされるので、その点で書写山とはつながりを持つ。ただし、血脉中の人名と書写山との関係は管見の限り見出せない。
- (6) 沼本克明「読経口伝明鏡集（故山田孝雄博士蔵文安本・川瀬一馬博士旧蔵文亀本）解説並びに影印」（『鎌倉時代語研究』一三輯、一九九〇年一〇月）。永正本については、『古辞書音義集成5 法華経音義』（汲古書院、一九八〇年、築島裕解説）。清水真澄『音声表現思想史の基礎的研究 信仰・学問・支配構造の連関』（三弥井書店、二〇〇七年）をも参照。
- (7) 柴佳世乃『読経道の研究』（風間書房、二〇〇四年）。
- (8) 柴『読経道の研究』資料編参照。

- (9) 柴佳世乃「六所家本『読経口伝明鏡集』について」(『六所家総合調査だより』六号〈富士市立博物館〉、二〇一〇年三月)にも、諸本の撰述や系統についていささか論じた。
- (10) 柴『読経道の研究』資料編参照。
- (11) 「私云」は、文明十七年(一四八五)の書写者によるものか。
- (12) 『法華経声韻私』ならびに『法華経転読明鏡集』については、柴『読経道の研究』に既に触れた。弥勒寺本およびその他の本の出現により、不明であった祐円の事蹟が徐々に明らかになってきた。
- (13) 本書は、書写山における「法華音曲」の経文および博士譜である。桜井貫道による近代の写しであるが、文明三年(一四七一)の本奥書があり、「書写山長吏豪盛法印様」とある。奥書は次の通り。
- 右此叩聞書者、書写山前密厳院長吏豪盛法印様稽古仕耳底留分、去文明三年〈辛卯〉六月三日、於播州赤穂郡富満寺、多門房地藏院兩郎私心約束書博士付者也。古本云、博士位不存之間、定而可多誤、然間、有外見憚、努々不可有他見、穴賢々々、／于時文明七年〈乙未〉八月六日、於書写山普賢院、重而清書之、禪定盛淳七々歳時記之／書写山禪定房盛淳之」(私に翻刻し、読点を付した)。
- なお、柴佳世乃「読経道と読経音曲―読経音曲の復元に向けて―」(藤田隆則・上野正章編『歌と語りの言葉とふしの研究』、京都市立芸術大学、近刊)にも、その梗概を紹介した。
- (14) 柴『読経道の研究』資料編および、本文編第二章第三章を参照。
- (15) 祐円について明らかになれば、都から書写山への「読経音曲」の伝来継承について、少しく脈絡が見えてこよう。この点に関して詳細な検討は、後日を期したい。
- (16) 『統天台宗全書』史伝一 所収。「慈眼国師」なる称号は、「鎮増私聞書」に例えば「鎮増国師」と見えるように(一箇所存す)、私の称号と考えられる。いずれにしても、書写山における鎮増の位置や、撰述者との距離の近さを物語るものであろう。

付記 本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C））による研究成果の一部である。

謝辞 貴重な資料の閲覧と紹介をご許可下さった弥勒寺久世円寿師に、厚く御礼申し上げます。

## 書誌

### ○『読経口伝明鏡集』

折葉装一帖。版経（折本）の紙背に墨書。表書は、『妙法蓮華経 譬喻品第三』（版本）。

法量、縦二十七・〇糎、横九・五糎。

表紙は本文共紙。料紙は楮紙。墨付き三十八折。文中に訓点（墨および朱）、声点（朱）が施されている。声点図あり。

外題なし。内題「読経口伝明鏡集之内少々 下巻別巻也」。一面行数、五行ないし六行。

奥書、「永正十八年（辛巳）六月三日、寛文八年（戊申）九月廿日」（中奥書）、「貞享二年（甲子）極月廿五日尾州蓬萊宮円空書写之」（書写奥書）。

### ○『法華経声事』

装丁、法量、表紙・料紙などは、すべて『読経口伝明鏡集』に同じ。『読経口伝明鏡集』に続けて、折を替えて書写されている。

墨付き四十折。文中に訓点（墨および朱）、声点（朱）が施されている。声点図あり。

内題「法華経声事 上巻 別巻也」。一面行数、五行ないし六行。

奥書、「于時文明七年〈乙巳〉九月一日書之」（中奥書）。

翻刻は、次のような方針で行った。

- 一、漢字は通行の字体を用い、割り注はへで括った。合点はゝで示した。
  - 一、表題冒頭の記号は、「○○」で示した。
  - 一、読解の便宜のため、私に句読点を付した。
  - 一、折丁ごとに『を付し、行頭に冒頭からの折数を示した。
  - 一、声点や濁点は印刷の都合上、省略した。なお、声点の有無はまちまちで、一定していない。
  - 一、78折の最後の行「○○一同集云 智者大師ト有レ之」は、続けて記される書物の表題であり、（ ）で括った。
- なお、末尾に、一部の影印を載せた。

### 【翻刻】

○○読経口伝明鏡集之内少々 下巻別巻也

1 夫欲<sup>レ</sup>嗜<sup>ニ</sup>読経道<sup>一</sup>之者、先須<sup>下</sup>遇明師、習<sup>中</sup>伝三種大事<sup>一</sup>。謂其三者、<sup>一</sup>一ニハ<sup>タシナム</sup>可<sup>レ</sup>紕<sup>ニ</sup>文字声<sup>一</sup>、<sup>二</sup>二分<sup>ニ</sup>清濁<sup>一</sup>響<sup>一</sup>、<sup>三</sup>三可<sup>レ</sup>習<sup>ニ</sup>音曲体<sup>一</sup>也。不<sup>レ</sup>存<sup>ニ</sup>知如<sup>レ</sup>此口伝者、全非<sup>ニ</sup>能<sup>ク</sup>読<sup>一</sup>。仍為初心令記之者也。

一、可<sup>レ</sup>紕<sup>ニ</sup>文字声<sup>一</sup>一篇

2 先就文字可<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>四種口伝<sup>一</sup>。所謂其四者<sup>一</sup>一者四声、<sup>二</sup>二者六声、<sup>三</sup>三者八声、<sup>四</sup>四、九声也。』高野大僧正四声論云、配四方<sup>ニ</sup>、<sup>一</sup>東方平声、<sup>二</sup>南方上声、<sup>三</sup>西方去声、<sup>四</sup>北方入声也。

平声春

平、春、木、青、生、發心也

上、夏、火、赤、老、修

3 去、秋、金、白、病、菩

入、冬、水、黑、死、涅槃

宮商為平声、徵為上声、羽為去、角為入声。就四声有二義。一ニハ三声融通、二ハ入声不通也。三声融通之字出之。

王王王三声〈大王・諸王・王子〉長長長〈長寿・身長・增長〉当当当〈々知・応当・当時〉行行行〈行烈・修

4 行・梵行〉平平平〈平等・公平・地平〉間間間〈在門・沙門・重門〉門門門〈在門・沙門・重門〉方方方〈十

方・他方・大方〉便々々〈々生・而々・方々〉応々々〈々以・随々・感々〉年々々〈々始・十々・多々〉観々々

〈々音・諸々・々法〉遠々々〈久々・懸々・長々〉重々々〈々門・九重・尊重〉難々々〈阿々・雖々・艱々〉

5 濟々々〈拔々・持々・々度〉因々々〈々縁・諸々・恒々〉辺々々〈々際・无々・某々〉安々々〈々穩・心々・々

慰〉專々々〈専心・不專・々精〉水々々〈水火・諸水・水精〉已上是皆三声融通文字等分明證拠也。

次三音相通字、少々勘レ出レ之。

楼々々〈々閣・富楼那・弥楼山〉差々々〈々別・不々・得々〉王々々〈国々・天々等・梵王〉法々々〈々性・々

6 味・正々〉悪々々〈々業・善々・三々道〉楽楽楽〈快々・妓々・願々〉

以上三音相通字、如此。

人二声融通字、少々勘出之。

- 迦々〈釈迦牟尼仏・伽陵頻伽声〉分々〈二分・分別〉重々〈々難・々罪〉海々〈大々・如々〉相々〈々抄・々  
 7 撲・々続・々応〉曼々〈々殊・須々那〉往々〈往来・往古〉願々〈々樂・々文〉精々〈々進・水々〉雲々〈々  
 雷・々集〉推々〈々尋・々落〉者々〈名々・智者大師〉経々〈々典・諸々〉根々〈大々・中々〉況々〈何々・々  
 復〉第々〈第五十・卷第一〉尔々〈々時・々乃〉摩々〈々訶・々尼〉久々〈々遠・々乃〉五々〈々百・々千〉  
 乃々〈々至・尔々〉帝々〈々釈・々王〉志々〈梵々・々念〉懈々〈々怠・々倦〉九々〈々百・々千〉馳々〈馳々・々  
 8 驢〉聖々〈々主・々人〉二々〈二十・二億〉中々〈中品・其中〉三々〈三身・非三〉沙々〈々金・恒々〉弟々  
 〈弟子・付弟〉頻々〈々彼沙・々婆果〉待々〈々説・々待〉并々〈山三井寺〉教々〈々化・々戒〉好々〈相  
 好・赤好〉阿々〈阿弥陀・阿羅漢〉弥々〈々勒・橋曇弥〉甚々〈々遠・々深〉右々〈左々・々邊〉論々〈戲々・々  
 議〉

如是二声融通字多之。略出少々之。

次両音字、少々出之。

- 9 垂々〈々諸環珞・々得阿〉恒々〈々沙・々順〉無々〈々辺・南々〉内々〈々外・出々〉反々〈六反震動・若  
 他反逆〉音々〈妙々・観々〉已々〈々説・不已〉関々〈クワンクエン〉能々〈ノウタイ〉施々〈セシ〉旦々〈一々・修々〉方々〈々便・順々〉  
 顔々〈カンケ〉容々・尊々〉縁々〈エンネン〉有縁・因縁〉隅々〈エヨウ〉適々〈チヤクシヤク〉々々其願故・々從三昧起〉隠々 安穩  
 次入声字、随所説他声字、勘出也。

- 10 若々〈阿々〉惡々〈々罵〉出々〈出内 スイヌイ〉備備〈々問〉

〔簾々〕〔如々〕〔积々〕〔积提恒因・积加牟尼〕

次他声字ヲ、由所被レ読入声ニ一字、少々勘出之。

度度〔々々〕数々〔々々門〕<sup>サイセツ</sup>切々〔切己〕滴々〔一々〕

已上二音相通字、大旨付二所学ニ所勘出也。

是等皆三声融通并二二音相通分明證據也。

11次、入声不通ト者、所謂不津久智幾五字也。今此五箇「字外ニハ全ク无レ之。入声字者文字終不津久知幾ト突レ舌

読留ル字共字共ハ必ス皆云入声字也。而ヲ今法華八軸ノ中一切ノ入声字等皆悉勘出之也。一々各別ニ彼五箇ノ字

下ニ可レ注ニ付之ヲ。

### 第一不ト者

12法葉入劫及合業妄撰雜十習立鎖」<sup>ホフセフニフ</sup> 甲給塔巾狹邑鴿集<sup>カフキワタフサフケフフカフシフシフリフラフ</sup> 銷急斃<sup>キョウキツセフ</sup> 輒執治葉泣<sup>ワツセフ</sup> 通納怯接汲拾納猥濕郁厭<sup>ツウナツセフ</sup> 洪<sup>フ</sup> 已上四十

### 三字

### 第一津者

仏囀〔見仏反〕出窟〔久出反〕弗弘屈〔久仏反〕已上七字

### 第一久ト者

13得目学属六亦<sup>トクモクカクソク</sup> 輒<sup>クヤクソク</sup> 銀<sup>ギン</sup> 百億息業<sup>ヒヤクヤクソク</sup> 勒<sup>ロク</sup> 積<sup>シヤク</sup> 秋<sup>シヤク</sup> 各若<sup>カクニヤク</sup> 樂塞<sup>ラクサク</sup> 獄欲<sup>コクヨク</sup> 国白<sup>コクハク</sup> 惡福<sup>アクフク</sup> 覺略<sup>カクラク</sup> 或肉<sup>ワツニク</sup> 足服<sup>ソクフク</sup> 獨擊<sup>ドクキヤク</sup> 寂默<sup>シヤクモク</sup> 辱浴<sup>ニクヨク</sup> 着特<sup>チヤクトク</sup> 益辟<sup>イクヒヤク</sup> 即<sup>ソク</sup> 14讀<sup>トク</sup> 適<sup>トク</sup> 速族<sup>ソクソク</sup> 度竹<sup>タクソク</sup> 莫縛<sup>モクバク</sup> 昔則<sup>シヤクソク</sup> 惜<sup>シヤク</sup> 曲<sup>コク</sup> 石木<sup>シヤクモク</sup> 刻<sup>コク</sup> 赤<sup>シヤク</sup> 錫角<sup>シヤクカク</sup> 笛<sup>フエ</sup> 統躍<sup>トウヨク</sup> 剋<sup>コク</sup> 責<sup>チヤク</sup> 數憶<sup>ソクオク</sup> 落側<sup>ラクソク</sup> 宅閣<sup>タクカク</sup> 壁<sup>ヘキ</sup> 滅鹿<sup>メツロク</sup> 洛僕<sup>ロクボク</sup> 僕畜<sup>ボクソク</sup> 觸<sup>チヤク</sup> 辟<sup>ヒヤク</sup> 鵲<sup>セツ</sup> 腹<sup>フク</sup> 嚼<sup>キョク</sup> 博<sup>ハク</sup> 完毒<sup>ハクトク</sup> 尺<sup>シヤク</sup> 捉<sup>トク</sup> 攢<sup>サン</sup> 脚<sup>キョク</sup> 黑爆<sup>ハクハク</sup> 育<sup>ヨク</sup> 蔭<sup>イン</sup> 威<sup>キ</sup> 駝<sup>ダ</sup> 擲<sup>チヤク</sup> 腹<sup>フク</sup> 覽<sup>ラン</sup> 劇<sup>キョク</sup> 逆<sup>ギャク</sup> 擇<sup>セツ</sup> 沢<sup>セツ</sup> 魄<sup>ハク</sup> 客<sup>キヤク</sup> 歷<sup>リヤク</sup> 愕<sup>ハク</sup> 躡<sup>ニョク</sup> 勅<sup>チヤク</sup> 覓<sup>ミヤク</sup> 夙<sup>ソク</sup> 索<sup>ソク</sup> 席<sup>シヤク</sup> 熟<sup>ジュク</sup> 谷<sup>コク</sup> 穀<sup>コク</sup> 礫<sup>リヤク</sup> 棘<sup>キヤク</sup> 墨<sup>モク</sup> 拍<sup>ハク</sup> 北

[illegible]

魚セツクワツコツ活ハツ乞マツシチセチ蔑マツシチセチ罰マツシチセチ《已上五卷》沫マツシチセチ瑟マツシチセチ舌マツシチセチ《已上六卷》欲タツ奪タツ《已上八卷》已上八十七字也。

識植力色飾直測式食殖  
〔已上十字、此内同音字六字殘三字別〕

第六声者、以前四声ノ図ヲ、平声与上声ノ中間ニ指レ之点有レ之。其□如是。今此ノ中間ノ点平声輕ノ読レ之時ノ18其注指レ之点也。件ノ字者、一切ノ一字是也。此字外ニハ全ク法花八軸ノ中ニ被ルレ讀ニ平声ヲ輕ク字無レ之也。』

復次去声与入性中間指之点有之。其形□如是。今此中間ノ点者、則入声ノ字輕読点也。件ノ字者随レ所ニ由レ事  
 19ニ入声ヲ輕ク読レ之字、少々可レ勘ニ出之一。所謂薄拘羅 如優雲鉢華 生育 鹿車 本国 他国 奇特 樓閣

入如來室、隨二安<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>一勘出之。已上、六声分明證拠也。其図形<sup>〇</sup>如此。第三、八声者、明師云、以二六声圖一  
中間ニ指<sup>レ</sup>之。其形<sup>〇</sup>如此。今此頂上ノ中点者、本声、雖<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>去声字<sup>一</sup>、被<sup>レ</sup>引重ネ上ノ字ニ被<sup>レ</sup>読成二上声響音  
20ニ之時ノ注ニ指<sup>レ</sup>之点也。』件字共少々可<sup>レ</sup>勘出之一。謂、世尊々字、本声去声也。然而此字三尊読之、若ハ諸尊  
等ト読之時、其響<sup>キ</sup>似二上声<sup>一</sup>。又、妙音ノ々字、觀音読<sup>レ</sup>之。大王々字ヲ、天王ト読之。十方々字、東方ト読之。

21如是等ノ文字共多之。以二上件四箇字一、自余之字等ハ可ニ准知一也。復次ニ、平声与入声中間指之点』有之。其形□。如是。今此中下間点者、仮令雖レ為本声ハ入声字隨レ所由レ事、被讀成平声ニ之時注ニ指レ之点也。件字者、所謂妙法ノ々字、本声ハ入声ノ字也。其故、此字、法身・法性・法花・法相等讀之。然共、此字ヲ、与仏法・王22法・諸法等讀之時、即此字響似リニ平声一。雖レ然正ク非ニ平声字一』故此点ヲ平声立方寄レ之文字ノ下中間ニ指之。自ニ往古ニ作法也。先哲ノ口伝如レ是。

又云、業報・業障・業苦等讀レ之。然者而、此字善業・惡業・定業・非業等讀之時、如前ノ文字下ノ中間指レ23之。凡如是、注ル点皆是上代先德所定也。以二今此法ト業トノ兩字一、自余ノ字共ニ可ニレ准知者也。已上八声口伝并点図形合出之。其形○○○。如此。第四、九声者、以前ノ八声図其中心ニ一点指レ之、成ニ九声一。所謂、其形○○○。如是。今此中心一点者世間ニ希ニ有ル事也。古老相伝云、此九声点図者、輒ク不レ可ニ披露一。』尤為ニ殊勝一。又、賀州温泉寺ノ明覺三藏云、於ニ此九声点図一段一者最極秘事也。努々不レ可ニ及外見ニ云云。性空聖人25云、又普賢・文殊・觀音・弥勒等、皆夜々来テ談ニ法花ノ極理ヲ一、說ニ仏法懊惱一。然者權者所レ定』可有何謬耶。尤可レ被ニ信心一。更不レ生ニ疑難一者也。又、高雄ノ高弁上人云、明惠房是也、於ニ此九声点図ニ一者、世間未タニ広流布一。依レ之、遍不レ知レ之、適知人希有事也。然即、於此一段一者、尤奇特殊勝事也。抑令此中26心点』注字者何等字耶。

口伝一卷、若若〈阿若〉葉葉〈迦葉〉樓々〈富々那〉樂樂樂 惡惡〈惡罵〉適々〈從三昧〉度々〈度量〉南々〈南无〉無々〈南无〉画画〈二卷〉数々〈々間〉切々〈一切・切已〉已已已 尺々反々〈六反〉施々27〈施行・張施〉囑々出々内々借々〈借問〉三卷、能々〈二說〉滴々〈二々・一々〉垂々〈々得〉推々

《々落・々尋》 四卷、易々《貨易》 関々《鑰》 逗々《二說》 楼々《弥楼山》 五卷、相拟《相拟二說》 常樂

《常樂二說》 長短《々々》 待々《待說・且說》 六卷、差々《差別・得差》 方々《八方・九方》 展轉《展轉》

28 曼々《々々殊沙・須一那》 七卷、容顔《容顔》 續々《為々・為々》 復々《還復》 敵敵《怨々・怨々》 八卷、

推落《々落二說》 龍魚《々々二說》 降電《降電二說》 如魚《如魚二說》 壓々《二說》 珂月《珂月二說》

手脚《手脚二說》 惡瘡《半葉切》 已上、如是隨レ事由所読替辭說字共存之。其注指レ之。惣此文字中心点図作

29 法、自三往古二諸大師先師面々ノ議各々說雖レ区、大略』以如レ此。二曰ク、可レ分二清濁二事。先付二清濁二二

有三口伝一。今此清ト者文字ノ声澄云レ清也。付之雖レ有二重々議一、所レ詮不レ過二五音一云々。中ニハ專用二六

句一。其六句者、所謂、悉曇云、初後相通

30 アイウエヲ本 声 ナニヌネノ』

二四相通 マミムメモ ラリルレロ

三五相通 ヤキウエヨ ワキウエヲ

今此六句ノ此字五音ハ、皆是澄字ノ根源也。此一々文字 戴レ首字共皆可知二澄字一。此字共ニ指声之時ハ一点

31 可レ指レ之。初心』者出其図云、澄清

妙音 阿難 未来 有縁 面貌 六入 一目 木櫛 若減 亦勿

如来 瑠璃 羅網 摩尼 无明  輦輿 門内 瑪瑙 惠雲 二万

今此図者、每其一声各ニ加フ二五箇重字一。皆是根本澄レ字等也。如此文字雖レ多レ之、可レ得レ心。已上澄ル

32 字ノ作法、大旨如斯。』

次、濁者、是文字ノ声從レ本濁ト云事也。但シ此就二濁字一有二差別一。一ニハ曰二本濁一、二ニハ曰二新濁ト一也。所謂先本濁者、從レ本以來濁ル字也。今此濁ノ字以二五音一如レ前可レ定レ之。其五音中ニハ專ラ用二四句一。々々33者、』

相通同上

カキクケコ サシスセソ タチツテト ハヒフヘホ

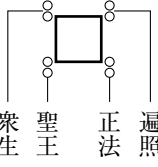
今此四句廿字五音ソ皆濁字根源也。此廿字戴レ首字共ハ皆是可レ知二濁字一也。此ノ字共ニ指レ声之時横二点並テ指レ之。其形如此。』但シ此五音清濁二種相雜ワリ被レ讀之字共多レ之。能々可ニ分別レ得レ心。𪛗ク為レ令レ存知初心者、出二其図一。其形云、

大乘 甚深 道場 現前 善哉 白仏 及業 仏学 及読 仏獲  
35 菩提 牛頭 求便 毘陀 其形  浄土 梵行 大願 自在 奉獻』

此図則、本濁字指レ声形也。自余者、如此可存之已上。本濁ノ作法如斯。

次新濁者、是假令本声清澄ノ字被ラ重テ二上字一、初テ濁ラ被二讀成二字共多之。如是字等皆是曰二新濁字一。件ノ36字共ニ指レ声之時豎二重二点一指レ之也。其形。如此。是偏二』為初心者令存知出二其図二云ク、

37

  
遍照 應身 善根 專精 流水  
正法 本覺 万劫 兩足 往昔  
聖王 王子 勸請 讚嘆 長者  
衆生 波闍 融通 衆多 由旬』

是則新濁ノ字指声形也。自余字可レ准ニ知之一也。

已上、三箇図形、清濁之淵底如是。猶々能謁ニ明師ニ可口伝者也。

書写山光照院御本

永正十八年〔辛巳〕六月三日 寛文八年〔戊申〕九月廿日

38 貞享二年〔甲子〕極月廿五日尾州蓬萊宮圓空書写之。』

〇〇法華經声事 上卷別卷也。

誦誦之時、四声ニ輕重ヲハヨミナカラ声ヲハ四角ニ指之。其形如此。

去声 入声



上声 半声 (ママ)

39 以前ノ四声上ニ平性輕キ一点入性輕一点此ニツ加為六声ト。其形如是。』

入声輕云

法華・出華・日中・入中・日天・月天等也。

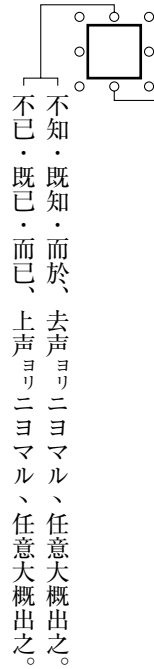
入声ヨリ上声伝ヘヨム時入性輕成ナリ大概出之。

平声輕云、是人・一切・我今・世尊・阿難等也。

平性ヨリ去性エ伝ヘヨム時平性ハ輕成也。

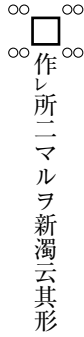
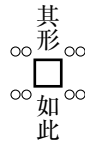
40 次八声者、以前六声上ニ去性輕上声輕名テ任意ト一点入声重一点此ニヲ如テ為スニ八声一。其形如レ此。』

妙法・及業・宝塔・業劫・業答等大概出之。



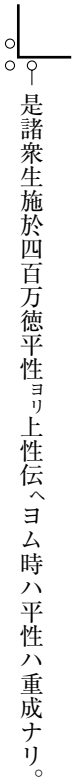
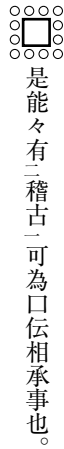
又四声

41 新濁本濁之声ヨリニツマルヲ本濁ト云。』



十二声図

42



是人・我今・有人、平性ヨリ去性伝時平性ハカルクナルナリ。

43

阿修羅住羅騫駄

阿修羅等恒河沙等阿若



文殊真言聞經還令当成

文字真実聞仏還復当得

44

法華出家悉見法説説仏仏悉十信  
妙法劫妄構業塔雜

本云延文四年（乙亥）六月十日六根清浄住祐円

45 之者、偏ニ彼上人御恩也。彼上人者、書写開山性空上人御再来无レ疑。殊勝々々。可得意々々。』  
私云、一説ニハ宣仁上人トモ申ス。彼上人ノ御自筆本以写。

干時文明十七年（乙巳）九月一日書之。

私云、四声図

去声 入声

不津久知幾

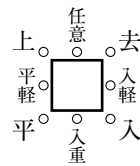
46 上声 平声

私云四性ハ何レカ一何レカニト次第スルソヤ。

。東。 法仏得説色

〱私云、ヲ、キ字中ニ何ニトテ東ノ字ヲカクヤ。

47 〱答云、〱四方〱八方〱十方ト莊嚴スル時方ノ初ハ東ヨリ初マル間此字出。秘事也。』



八声図

〱私云、十二声ニ輕重ヲアツル事

一、平声ヨリ上性ヘツタヘヨム時、平声重ク成ル也。

48 是諸衆生・施於四百万億、是ニテ可レ得レ意也。』

一、平声ヨリ去声ヘ伝読時ハ、平声輕成也。

是人・我今、是ニテ可得意。サレトモ声ハ角ニサス。次ニ一切ノサイノ字ハカリ輕声ニサシ現ス也。

一、〱上性ヨリ平声ヘ伝読時、上性輕成也。

49 於此・而此、是ニテ可得意。』

一、〱上性重ト无左右雖ニ心得一性也。雖レ然、阿修羅羅字ヲ證拠ニ御出有ニ付テ能々案レ之、一ツ書ニツ目ノ字

上字性ニカワリテ少々下メニ聞ヘリ也。阿弥陀・富樓那、能々御説有ヘシ。サレトモ四ツ目ノ字サガリタルハ

50 三ツ目ノ字輕ク成也。』

阿弥陀仏・富樓那等如此在也。

一、去性ヨリ上性伝読去性重成也。

真言・聞経、是テ可得意。

一、去性ヨリ平性入声へ伝読時、去性輕成也。

51 問是・真実、是テ可得意。』

一、入声ヨリ上声伝読時、入性輕成。又法華・出華<sup>ケ</sup>テ可得意。又入声ヨリ平声伝読カルコトナリ。十信・仏委、是祐円法印ノ御勘合<sup>ア</sup>テ書キ御出シ候。

52 一、入声ニ付、入声ト云当在。法塔・難業・集構・『十劫ナント、云。カヤウニ字ノシタニ在<sup>ヲ</sup>フ入声ト可レ得レ意。サレトモ御経ニヨム時、法塔・難業・集構・十劫ナント、ヨムコト在。

53 一、フ入声ニツカナニカキテ今経ニハ見タリ余経<sup>ヲ</sup>ハ不存。』

一、入声経ハ上声位ナル間、他国々<sup>ラム</sup>他ノ位ヨム。本国<sup>ヲ</sup>ハ本ノスエテ国<sup>ヲ</sup>カラセテヨム。是ニテ自余可得意。

一、任意之事。文字読時、入ルマシキ歟。分別カナワス只上声ニキコユル也。但音曲時アリ。カネハハカセ又ハ去声ヘカリスコシナントヨム。又ハ上性ヘタ、ミコエナントイロ<sup>ノ</sup>ニヨムアイダ心ニマカスト云フ声也。云イ、

54 云フ本性トハ不可得意。』

一、輕中重・輕中輕ト云事在。其證拠ニハ、及諸・僮僕ニテ可得意。

右十二声ヘワタル声ノ在。大概如是私分也。

私云、

55 一、可字、一卷ニテ一ヶ所ノ此事為不可トアケテヨム。』

一、量字、サカリタリ。一卷、共思量・非思量ト二ヶ所也。

一、度、一卷二ヶ所度トヨム。

一、者、使者時上ル。

一、者、使者ノ時上ル。

56 一、子、子息時上ル。』

一、重、三卷重門時上ル。門重・門時サカル。

一、況、四卷況滅度後時上ル。

一、涌、四卷涌現其前時上ル。

57 一、納、五卷納衣在空閑ノ時ツホム。』

一、満、サカリタリ。四卷ニ功德悉満、六卷具満八十歳、七卷以七宝満、以上法華經中ニ三ヶ所在ル。但シ以七宝ト句キレトラハ満三千サカルナリ。

58 一、徳、一卷仏徳、五卷智徳、六卷如是徳其徳、今經ニ四ヶ所輕ニヨム。只徳ト云時モアカル也。』

一、此、五卷不信此女時ニコル。八卷把此ニコル。

一、当、五卷当時衆会、七卷当尔之時、今經ニハ二ヶ所ハカリサカル。但、当座・当用・当山・当寺・当奉  
59 行・当行事ナント云テ、アタルト云フ時ハサカル也。当ニ時ハアカルナリ。』

一、聖ハ、サカリタリ字也。但聖人ノ時上ル。人ハアカリタル字也。聖人ノトキサカル也。

一、教、サカリタル字也。八卷ニテ教戒トハカリ一ヶ所上ル也。

60 一、方ノ字、二卷順方治病、六卷方藥・経方ト、以上三ヶ所ツホム。又云、方丈・方円時、ツホム。』

一、雙、紙<sup>テ</sup>隨風ノ一ツ雙<sup>テ</sup>隨子、一ツ雙<sup>テ</sup>ノ時ハヒツク。雙<sup>テ</sup>調時ハツホム。仙海法印衣印ノ。

一、実語教<sup>コツ</sup>ト心空上人ノ法花経ノ音義見タリ。

61 私云、心空上人御ナラシ少々書キ出ス。』

先ツ平ハ、法花経トヨム。今ハ法花経御ナラシ。耆闍崛山中へ嵬ト御ナラシ。薄狗羅ヲハ、薄トヨム。捏<sup>ネツ</sup>槃<sup>ハン</sup>ヲハ、  
涅<sup>ネ</sup>槃<sup>ハン</sup>トヨム。今日中夜カナソアラワシテヨム。而不利ヲハ、通利トヨム。優婆提舍経ト去声ニヨム。

62 二卷、へ以仏教門ト上声ニヨム。へ梁棟傾斜、新濁ニサスヘシ。へ鳥鵲鳩鴿ト上声ニヨム。へ蜈蚣蚰<sup>ヒ</sup>蚪ト上声ニ

サスヘシ。其咽如針平声ヨシ。へ益我愁惱ト上声ニヨム。へ妖<sup>ヒ</sup>佻嬉戲トヨムヘシ。へ阿<sup>ヒ</sup>鞞跋致ハ本平声ニヨム、

63 ワルシ。阿<sup>ヒ</sup>鞞ト上声ノシツミコヘニヨムヘシ。へ阿<sup>ヒ</sup>鞞へ阿推ト、不翻ス。跋<sup>シ</sup>致ト越致ヲハ退ト翻。審知是子ヲ、審

平声ニヨム。伶俜辛苦ヲハ伶俜トトモ平声ニサス。へ演<sup>シ</sup>其<sup>シ</sup>実事トカナヲアラハシテヨム。

へ三卷、へ耳<sup>ヒ</sup>鹿蒲萄ノ蒲ノ字、平声ニヨシ。へ説最<sup>シ</sup>実事、カナヲアラワシテヨム。へ知<sup>ヒ</sup>仏入室、カルニアク。

64 入ヲハ平入声ニシテ室ト輕クヨミテヨシ。不通名目ヲツカイ、入室トツカウ間、可用トモ。へ当<sup>シ</sup>觀察<sup>シ</sup>量ノ觀ヲ去  
声ニヨシ。

へ四卷、へ常能審諦審ト平声ニヨシ。於賢劫中ノ賢ハ、去声ヨシ。雖小欲懈怠ト本ノヨシ。今ハへ雖トヨミキリテ、  
65 小欲懈怠トヨムナリ。誰能護法トヨム。』

へ五卷、へ大智德、輕ニヨシ。へ我見釈迦如来、上声ノシツミコヘニヨメハ、名目ツカヒニカノウトアラハシ  
イタサリタリ。

ゝ慈眼国師ト長信ハクツキトアラハシ。

66 非是法器ヲハヨムヘシ。諸惡律儀トカナヲアラハス。亦无憂惣ヲハ憂惣トヨム。賞賜諸物ヲハ、『賞ト上声ニヨム。忠賞・恩賞ノシヤウナリ。』

六卷、ゝ万億劫数中ヲハ、万億劫数中トヨム。若見此法師ヲハ、若見トヨム。ゝ亦不曲戾ヲハ、戾ト去声ヨム。67 惣歎声トヨムヘケレトモ、ツネノ名目ツカイシユウタントアルニヨキ。シユウトヨム。』

比丘尼声ヲハ声トニコツテヨム。至於一月四月トハネテヨム。

七卷、五百比丘ト句ヲ切テ尼思仏等トヨム。阿闍婆等偈トヨム。偈ノナリ。容顔甚奇妙ヲハ、心空上人容顔御ナヲシ也。慈眼国師モヨウケントアソバシ。サレトモ多分ヨウケントヨムル、ナリ。』

今復還親近トヨム。諸余怨敵ハスメリ。今ハ、ランテキトニゴリヨムナリ。白銀為葉ヲ、白銀トニコツテヨシ。以十万種伎楽ヲハ、種ニコツテヨシ。

八卷、而紺青色、コント去声ヨシ。ゝ白如羽月ヨシ。可用之。ゝケツトモヨム。不用之。

69 手<sup>モヤケレツツ</sup>脚<sup>モヤケレツツ</sup>繚<sup>モヤケレツツ</sup>戾<sup>モヤケレツツ</sup>去声ヨシ。』

二卷ニ、名第三諦トアリ。是ヲハ三諦トスミテヨムヘシ。苦集滅道中ノ滅諦ナリ。

余卷ニ、空閑空閑処ト云事多シ。皆空閑トヨムヘシ。但音曲ニハ、クケントモヨム事アリ。

70 五卷、大乘空義空義トヨムヘシ。』

一、ゝ師伝云、ゝ一称南无<sup>ナ</sup>仏<sup>モ</sup>喜称南无<sup>ナ</sup>仏<sup>モ</sup>慈眼、南无<sup>ナ</sup>南无<sup>ム</sup>南无<sup>ナ</sup>南无<sup>ム</sup>釈迦牟尼<sup>ナ</sup>ハナムトヨム。南无<sup>ム</sup>觀世音菩薩<sup>ナ</sup>ヲハナムトヨム。

一、<sup>モツシヤウ</sup>没上<sup>モツケ</sup>没下<sup>モツケ</sup>中略<sup>リヤク</sup>ト云事ハ、<sup>リヤク</sup>カナノアマタルニ、<sup>リヤク</sup>ウヘノカナヲノゾクヲ<sup>リヤク</sup>没上ト云ヒ、<sup>リヤク</sup>シタノ  
71カノカナヲノソクヲ<sup>リヤク</sup>没下ト云ヒ、<sup>リヤク</sup>中ノカナヲ<sup>リヤク</sup>ノソクヲ<sup>リヤク</sup>中略ト云フナリ。<sup>リヤク</sup>永ヲハ、<sup>リヤク</sup>ヤウトキコユルヤ  
ウニヨム。<sup>リヤク</sup>イヤウトハアラハサズ。<sup>リヤク</sup>是ホヲ没上ト云フヘキヤ。<sup>リヤク</sup>從<sup>シユウト</sup>カナツキタリ。<sup>リヤク</sup>シウトヨムトキハ、<sup>リヤク</sup>  
中略ニアタリ<sup>リヤク</sup>。若<sup>ニヤク</sup>若<sup>ニヤク</sup>トヨムトキハ、<sup>リヤク</sup>シタノカナヲノゾク間、<sup>リヤク</sup>没下ニアタルカ。<sup>リヤク</sup>先ッ存知見分<sup>ケン</sup>、  
72如形カキアラハシ畢。』

一、<sup>リヤク</sup>相伝<sup>フハ</sup>書<sup>キ</sup>写<sup>アタエ</sup>ヲシユルヲ云フ。

一、<sup>リヤク</sup>口伝<sup>フハ</sup>書<sup>キ</sup>アタヘズ<sup>リヤク</sup>クチニテ<sup>リヤク</sup>サツクルヲ云フ。

一、<sup>リヤク</sup>恒沙恒河沙時ハ、<sup>リヤク</sup>コウトツホム。<sup>リヤク</sup>恒修<sup>リヤク</sup>恒説<sup>リヤク</sup>ノ時、<sup>リヤク</sup>カウトヒラク。

73 一、<sup>リヤク</sup>如来十号時ハ、<sup>リヤク</sup>正偏知。本ハスミテヨム。』今知トニコツテヨム。

一、<sup>リヤク</sup>若烏摩勒伽、<sup>リヤク</sup>ロクトヨマス。

一、良能、九重第一之<sup>マヤ</sup>読、仙洞參勤長者也。能譽ト、弟子信昌ト、二人弟子也。彼弟子、立明鏡集トテ一卷ノ抄

74 作畢。其中云、』

或師説云、一ノ卷ノ比丘偈ノ奥ニ<sup>ワタ</sup>亘ルニ<sup>ワタ</sup>二音訓ニ被レ読ニ<sup>ワタ</sup>二両音一之字在モ、問テ曰ク、何等ノ字ソ耶。答曰ク、件ノ字ト  
者、画<sup>クワ</sup>一字是也。問曰、何故ノ此字ヲ画ト読之耶。画トハ<sup>クワ</sup>音火惡反<sup>クワ</sup>訓也。画ト者ハ音也。如何。答曰、自ニ  
75 上古一此字ヲ者、諸大師<sup>モ</sup>先德ノ点本、皆同ク此字ヲ画ト点スレ之。然者、經ニ云、綵画作仏像トモ、説供養於画像  
トモ、説在。如此自レ昔以来タ至レ今、画ト読レ之也。是皆偏ニ權者先德等ノ所ニ定置一也。何輒ク以テ<sup>モ</sup>実ニ者凡慮ヲ

76 一今更ニ可レ生ニ疑難一哉。恐クハ<sup>モ</sup>信モ可信、仰キモ可仰者也。或明師語云、從レ昔外曲ノ学生難曰ク、此法花經ノ

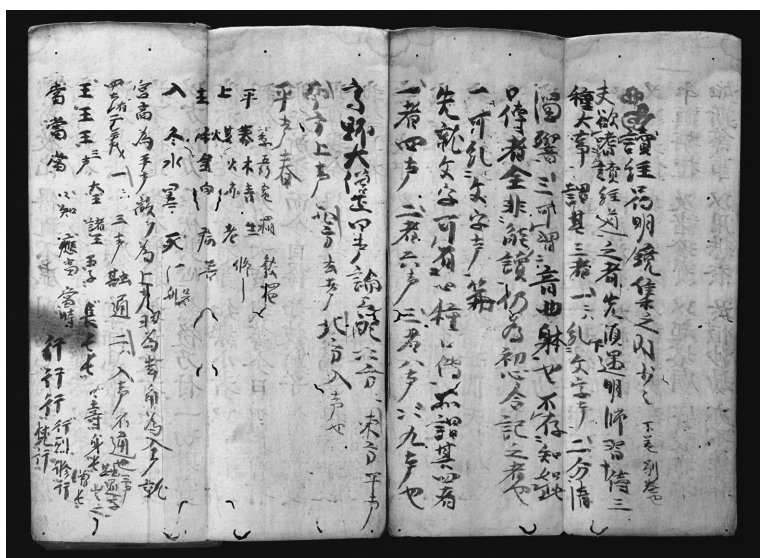
一ノ卷ノ奥ノ借被<sup>レ</sup>読<sup>レ</sup>訓ニ字在モ所<sup>レ</sup>得<sup>ウル</sup>綵画ノ々字是也。而<sup>ヲ</sup>此字ノ音画<sup>クワ</sup>也。画者訓也ト云フ。此義不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>然。  
77其故此字画<sup>エ</sup>〈音王世反画、又火惡反画〉。如<sup>レ</sup>此字音二種反音有<sup>レ</sup>之。何付二篇二可<sup>レ</sup>定<sup>三</sup>訓音<sup>一</sup>。全<sup>ク</sup>非<sup>レ</sup>訓。  
二ノ音共<sup>三</sup>音也<sup>二</sup>云云。如<sup>レ</sup>此說癖ノ文字共多<sup>モレ</sup>之、隨<sup>シタカツテ</sup>二案出<sup>アレンジ</sup>ニ一可<sup>レ</sup>勘註之。外曲ニハ云フ二両音ノ字ト<sup>一</sup>。

78 (〇〇一同集云 智者大師ト有<sup>レ</sup>之。)

【影印】

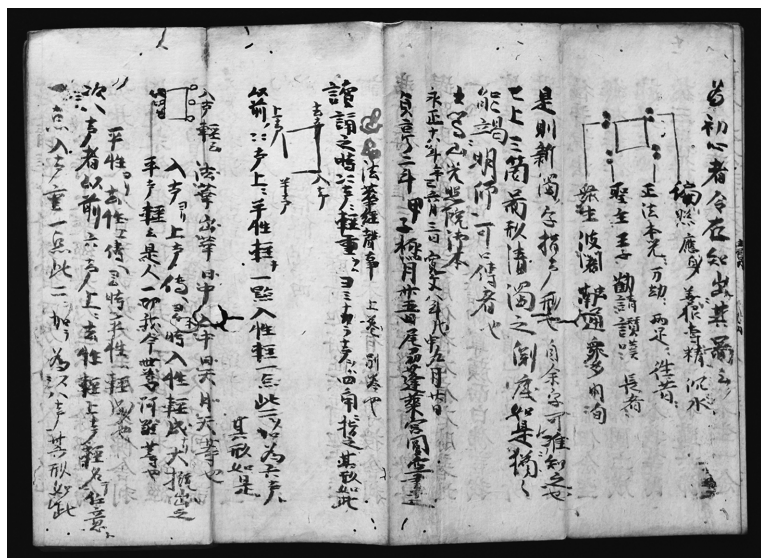


表紙（経本の裏表紙にあたる）



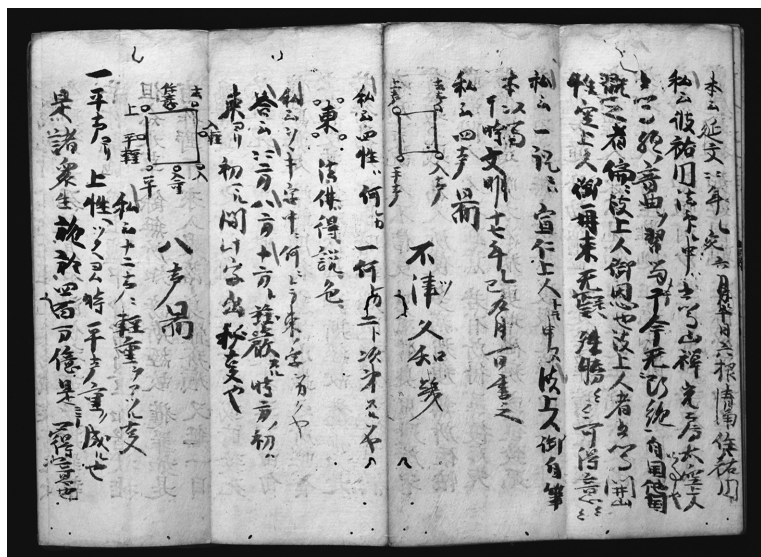
4 折

1 折



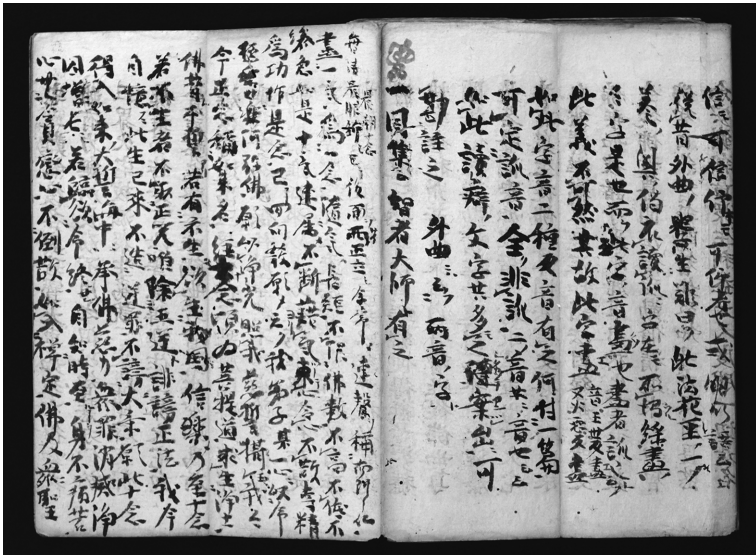
40折

37折



48折

45折



78折

77折



(参考) 表書き 経本 冒頭